

聖霊降臨後第17主日（特定20）（聖書協会共同訳）

憐れみ深い全能の神よ、どうか主の豊かな恵みによって、すべての害あるものから守ってください。身体と魂とに備えをし、あなたのみ心の思いを喜んで成し遂げることができま
すように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリス
トによってお願いいたします。 **アーメン**

旧約聖書 ヨナ書3章10—4章11節

3:10 神は、人々が悪の道を離れたことを御覧になり、彼らに下すと告げていた災いを思
い直され、そうされなかった。4:1 このためヨナは非常に不愉快になり、怒って、2 主に訴
えた。「ああ、主よ、これは私がまだ国にいたときに言っていたことではありませんか。
ですから、私は先にタルシシュに向けて逃亡したのです。あなたが恵みに満ち、憐れみ深
い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であるこ
とを私は知っていたのです。3 主よ、どうか今、私の命を取り去ってください。生きてい
るより死んだほうがましです。」4 しかし、主は言われた。「あなたは怒っているが、それ
は正しいことか。」5 すると、ヨナは都を出てその東にとどまり、そこに小屋を作り、日射
しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。

6 神である主がとうごまを備えた。それはヨナを覆うまでに伸び、頭の上に陰を作った
ので、ヨナの不満は消えた。ヨナは喜び、とうごまがすっかり気に入った。7 ところが翌
日の明け方、神は一匹の虫に命じてとうごまをかませたので、とうごまは枯れてしまった。
8 日が昇ると、神は東風に命じて熱風を吹きつけさせた。また、太陽がヨナの頭上に照り
つけたので、彼はすっかり弱ってしまい、死を願って言った。「生きているより死んだほ
うがましです。」9 神はヨナに言われた。「あなたはとうごまのことで怒るが、それは正
しいことか。」ヨナは言った。「もちろんです。怒りのあまり死にそうです。」10 主は
言われた。「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一
夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜しんでいる。11 それならば、どうして私が、この大
いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万
以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」

詩 編 第145編8—13節

- 8 主は恵みと憐れみに満ち // 怒るに遅く、慈しみ深い
- 9 主の恵みはすべてのものに及び // 慈しみは造られたすべてのものの上にある
- 10 主よ、造られたすべてのものはあなたをたたえ // 忠実な僕たちは感謝して歌う
- 11 彼らはみ国の栄光を語り // 力あるみ業を告げる
- 12 人の子らはあなたの力あるみ業と // み国の栄光を知るようになる

使徒書 フィリピの信徒への手紙 1章 21—28節 a

21 私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益なのです。22 けれども、肉において生き続けることで、実りある働きができるのなら、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。23 この二つのことの間で、板挟みの状態です。私の切なる願いは、世を去って、キリストと共にいることであり、実は、このほうがはるかに望ましい。24 しかし、肉にとどまるほうが、あなたがたのためにはもっと必要です。25 こう確信しているので、私は世にとどまって、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、あなたがた一同と共にいることになると思っています。26 そうなれば、私が再びあなたがたのところに行くとき、キリスト・イエスにあるというあなたがたの誇りが、私ゆえに満ち溢れるでしょう。27 ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、私は次のことを聞けるでしょう。あなたがたが一つの霊によってしっかりと立ち、福音の信仰のために心を一つにして共に戦っており、28 どんなことがあっても、敵対者たちにひるんだりはしないのだと。

福音書 マタイによる福音書 20章 1—16節

1 「天の国は、ある家の主人に似ている。主人は、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けとともに出かけて行った。2 彼は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場で立っている人々がいたので、4 『あなたがたもぶどう園に行きなさい。それなりの賃金を払うから』と言った。5 それで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろに出て行って、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と言った。7 彼らが、『誰も雇ってくれないのです』と答えたので、主人は、『あなたがたもぶどう園に行きなさい』と言った。8 夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい。』9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンプル受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていたが、やはり一デナリオンプルであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働かなかったのに、丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと同じ扱いをなさるとは。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか。』16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」